

高専における部活動の現状と課題

—硬式野球部に関して—

白根 弘也

The Present Condition and The Subject of Extracurricular Activities at College of technology —Related a Baseball Club—

Hiroya SHIRANE

(2001年11月30日受理)

Many extracurricular activities are located at the Akita National College of Technology, and it is doing its best in it aiming at the convention. However, the Baseball Club has the character different from other clubs, and is not functioning well. This paper is consideration for clarifying the present condition of a Baseball Club and carrying out a good function.

1. はじめに

学校教育における部活動は、青少年の心身の発達と学校生活の充実に資する豊かな可能性を持っており²⁾、学校教育活動の一環として教育上の活動と位置づけられている。³⁾ 本校でも、様々な部に数多くの学生が所属し、教官の指導の下、日夜練習に励んでいる。特に、運動部に所属する学生の最大の目標は、7月に開催される東北地区高専大会（以下高専大会）で、これで優勝すると全国高専大会に出場できることから、練習メニュー、年間スケジュールなど照準を合わせている。

筆者は平成12年4月に秋田高専に赴任し、硬式野球部の顧問に就くことになった。しかしそこで、硬式野球部には他の運動部とは違った環境が取り巻く、その機能がうまく果たされていないことに気付いた。本論は、硬式野球部の現状を明らかにし、よりよい機能を果たすための一考察を提言したものである。

2. 硬式野球部がおかれる環境

2.1 高専大会と高野連

各運動部で最大の目標としているのが高専大会であることは前に述べているが、大会要項の硬式野球競技の項を見ると、参加資格に「出場選手は各県の

高等学校野球連盟（以下高野連）に加入登録していないものに限る。」と書かれてある。また、同様に高野連発行の要覧にも、「(1)高等専門学校の希望があれば、特例として第3学年までの生徒で組織する野球部が都道府県高野連に加盟することができる。(2)都道府県高野連に加入した野球部の選手、部員は高専の大会には出場できない。」と明記されている。1～3年生が高野連に加盟した時期は全国の各高専によってまちまちではあるが、今では大多数の高専が高野連に加盟している。つまり、現在の流れでは高専・高野連両間での取り決めにより、入学した1年生部員は必然的に高野連に加盟し、規則により3年間は高専大会には出場できないことになっている。

他の運動部を見ると、1～3年生までは硬式野球部と同じように同年代が集う高校総体に参加し、県内の高校生と技を競い合っている。しかし、当然のことだが高専大会にも1～3年生は出場することができ、その選手達にとっても高専大会は最大の目標に成り得るのである。

では、硬式野球部の場合はどうか。1～3年生にとって出場することができる大会は、甲子園を頂点とする高校野球の県予選のみとなる。そして4、5年生だけが高専大会に参加するという、「2つのチーム」が存在することになる。

2.2 硬式野球部の練習環境

2つのチームが存在する硬式野球部であるが、練習場は1つしかない。そして、当たり前ではあるが、他の運動部と同様に放課後は1～5年生までが一緒に練習に取り組んでいる。

学校教育における部活動は、中学・高校・大学を問わず、上級生に主将を置き、上級生が中心となって練習を進めている。高専も同様に5年生が中心となって練習を進める部がほとんどだが、それは部員全員が1つの目標（高専大会）に向かって取り組んでいるからこそ為し得ることである。しかし、2つのチームを有する硬式野球部にはちょっとした弊害があるように感じられる。その理由の一つ目として、2つのチームの目標が違うことが挙げられる。チームの仕上がりの時期が違う2チームを同じ環境で練習させていることに疑問を感じる。もう一つの理由は、野球という競技の性質にも関係がある。野球の性質を理解しない上級生が中心になってもチームはまとまらない。

では野球の性質とはいったい何なのか。

3. 野球の性質

野球という名前のスポーツは誰でも理解はできる。しかし、硬式野球と軟式野球の取り組み方の違いは、分かっているようで意外と知られていないのが現状である。秋田県内で中学から高校・高専へ進学し野球を続ける選手の大多数は、高校・高専に入学してから初めて硬式ボール（以下硬球）を握り野球に取り組む。秋田県内で硬球を扱ったりリトルリーグは1チームしかなく、リトルリーグ出身者が高校・高専で野球を続ける選手はここ数十年あまり耳にしない。中学校時代、軟式ボール（以下軟球）に慣れていた選手は初めは硬球に戸惑いを感じる。それは、2つのボールの材質が全く違うからである。重さ、弾む高さ、球のスピードなど、今まで感じ取ったことがない体験をするからである。

一例を挙げると、軟球は手首のスナップだけで投げることができる。しかし、同じ投げ方で硬球を投げると必ず肘に負担がかかり怪我をしてしまう。⁶⁾ だから、硬球の投げ方の基本をしっかりと理解できない選手は1年生の春先に故障を起こしてしまう。また、野手のゴロの捕り方にも大きな違いがある。軟球は大きく弾んで飛んでくるので、ある程度バウンドに合わせて待って捕る捕り方を教えられる。それに対し、硬球の場合は、グラウンド状態で多少変

化はあるものの、ゴロで飛んでくる場合は地面を這ってくる打球がほとんどなので、前に出ながらグラブを地面に向かって垂直に立てて捕球するよう指導される。⁵⁾

このように、硬式と軟式では、見る側からすれば同じ野球であっても、実際にプレーする側からすれば全く性質の違う野球に取り組んでいることを理解していただきたい。

4. これまでの硬式野球部の現状

筆者が赴任時は主顧問ではなかったのですが、硬式野球部ではこれまでの流れ通りに5年生が主体となった練習が行われていた。新しく入った1年生は、雑用や球拾い、ダッシュなどの基礎トレーニングに時間を費やして、基礎的な指導は行われていなかった。しかし、全体の練習を見てすぐに目に付いたことがあった。それは上級生の硬球に対する取り組みが、明らかに基礎基本が不足しているということであった。1年生の時に基礎基本をあまり教えてもらえないまま学年が進み、いざ中心になって試合に出ようとしても、個人の基本不足がチームに大きく影響していることが一目で分かった。この流れでは、下級生がたとえ学年が進んで中心になったとしても、基礎基本を知らないまま試合に出てしまい、結果を残せない悪循環が続くのではないかという危惧を感じた。

また、1～3年生までは高野連の大会が出場できる大会であることは前に述べたが（2.1参照）、5年生が中心となって進めている硬式野球部の練習は、あくまでも高専大会が最大の目標として取り組んでいる練習であった。言い換えると、1～3年生が出場する高野連の大会は高専大会への通過点にすぎず、重視はしないということであった。チームの仕上がりも、1～3年生チームは大会にピークを迎えるような仕上げ方をしていないのが現状だった。

教育としての部活動の形態を考えると、中学・高校は3年間、大学は4年間と、3～4年で目標を設定している。4年という一番長い大学での部活動は、高校で3年間目標を達成してきた選手の集まりなので、人間形成はほぼ完成され、¹⁾ 4年間の目標に対して気持ちを持続させていくのは難しいことではない。しかし、高専の硬式野球部の場合、中学を卒業してまだ人間形成が完成されていない1年生が、5年先の目標に向かって4年間をただ漠然と練習させるのは気持ちの持続に限界があると考えられる。

高専における部活動の現状と課題

表1は過去10年間の本校硬式野球部の各種大会の成績である。この表を見ても、1～3年生が甲子園予選に目標を置かないで大会に参加していることが分かるし、その影響として高専大会でも優勝がないと言う結果に表れているのではないかと考えられる。

表1 硬式野球部過去10年間の各種大会の成績
(平成3年～平成12年)

年	高専大会	甲子園予選
平成3年	第3位	初戦敗退
4年	初戦敗退	初戦敗退
5年	初戦敗退	初戦敗退
6年	準優勝	2回戦敗退
7年	準優勝	初戦敗退
8年	第3位	初戦敗退
9年	初戦敗退	初戦敗退
10年	準優勝	初戦敗退
11年	準優勝	初戦敗退
12年	初戦敗退	初戦敗退

5. 部の改革

5.1 意識改革

筆者が赴任した平成12年夏、硬式野球部の監督を任されることになり、練習内容もすべて筆者に一任されることになった。当時の部員は、1年生5名、2年生6名、3年生8名、4年生5名（5年生は引退）の小所帯であった。しかも、3、4年生にとって、次の目標となる大会が1年後の高専大会ということもあり、練習参加率が極めて低かった。1、2年生にとっては、9月に高野連の秋季大会が控えており、いやでも練習してチームを作らなければいけない状況だったので、2年生の新主将を中心に毎日10名程度の人数で練習を行った。

そこで練習に取り入れた意識改革の一つ目は、少人数でも効率よく練習が行えるように、「試合のための練習」を意識させることであった。フリーバッティング練習では、これまでは2、3名がバッティングの控えに回り、残りの選手が外野で横一列に並んで球拾いをしていた。これはバッティング練習ではあるが、打者のためだけの練習である。そこで、打者は1名、残りは定位置でしっかり守り、打球を試合と同じように処理をする。打者は最後の1本を打

ったら走り、走塁の練習をする。いわゆる「実践シートバッティング」練習を取り入れた。守備では生きた打球が飛んでくるし、打者も自分が打った打球に対して真剣に走り、次の塁を狙おうという意欲が表れる。実践に近い練習をすることによって、試合でも対応できるのではないかと考えた。

さて、秋季大会の結果はというと、残念ながら1回戦敗退であった。しかも、6回までは6点差をつけてリードしながら、最終的には逆転負け。この原因は2つあった。まず1つ目は、人数不足からくる経験不足である。数多く練習試合をこなしたくても、それに耐え得る選手の数が足りなかった。いろいろな場面の試合を経験すれば、最後まで緊張感を持続させて試合を運ぶことができたが、逆転される場面を経験したことがなかったので、最後は対応できなかった。2つ目は、厳しい局面でのプレッシャーに耐えられるだけの精神力が不足していたことである。序盤はリードしているのでリラックスして打席に立っていた選手が、最終回、これで終われば負けるという場面でも打席が回り、緊張のあまりボール球に手を出してしまうという弱さが見えてしまった。

予想されていたことが大会で現実になったことから、意識改革の2つ目として、冬場の基礎トレーニングに精神面も鍛える練習を取り入れた。特別変わったことを行ったわけではないが、トレーニングの目標回数を多く設定したり、冬の寒さの中でも妥協せずにランニングやダッシュをしたりと、吹雪の日も日曜日以外は休まず、毎日継続した。初めはさすがに寒さに対し不満を漏らす選手もいたが、負けた悔しさを思い出したのか、次第に部員が自ら取り組むようになり、あきらめない精神が見られるようになった。

5.2 練習の中心となるチームの転換

夏から秋、冬と練習を続けてきたのは、1、2年生が中心であった。その間、3、4年生は、何人かは練習に参加したものの、毎日継続して参加した部員はいなかった。チームとしての機能を考えると、全員が一同に目標に向かって取り組むことが大事だし、3、4年生がもしこのまま個々で違う考えを持ってシーズンに突入して練習の中心になっても、同じ結果になるだろう。ましてや、シーズンオフの練習は1、2年生が中心となって進めてきたのに、これまでの慣例だからシーズンが始まったら上級生中心に切り替えるということは教育上到底できない。

前にも述べたが、入学時の基礎基本の指導が一番大事で(3参照)、さらに学年が上がるにつれて技術が上達することを考えたら、1～3年生のチームを中心に練習を進めることが高専の硬式野球部全体にとって最適な方法ではないか。その方が練習全体に活気や緊張感が生まれるのではないか。

そう考え、シーズンが始まった4月以降も1～3年生を中心に練習を進めていった。

5.3 部員数の改革

これまでは1学年5～7名が平均した部員の数であった。1チームにすると12～15名程度で、決して多くはなく、そのための弊害が幾つかあった。何と言っても一番の弊害は、競争意識の無さである。これまでのチームでは、人数が少ないので試合に出場することが容易であった。しかし、試合に出て当たり前前の慢心がある限り、技術向上にはいっこうにつながらない。秋季大会に向けた1、2年生チームの場合でも、11名という人数では競争しようという意識が全く見られなかった。同じポジションで共に競い合い、そして試合に出られる喜びを感じた選手が一人もいなかった。ライバルの長所を自分の目で確かめ、取り入れようという努力をすることが技術上達の第一歩だと考える。

弊害のもう一つは練習内容の制限である。11名いれば11名でしかできない練習は考えることはできる。しかし、どんな練習でも人数が多ければ充実した練習ができるのは事実である。実際にフリーバッティングでは、11名でも守備側が生きた打球を受けることができるが、外野に飛んだ打球を内野が中継プレーに動くことで、時間がロスしてしまう。そう考えると効率的な練習とは言えない。だが、内野の各ポジションに2名以上選手が着くと、後ろで控える内野手が外野の中継に動くことが可能で、試合を想定したプレーが十分できる。また、ランナーを実際に走らせる実践ノックなども人数が十分いなければできない練習である。

そのような考えから、平成13年度入学生に対しては部員が積極的に入部を勧め、結果として20名という、過去最多の部員数を獲得することができた。

6. 夏の大会までの足取り

新しいシーズンが始まり1～3年生を中心に練習を進めていったが、4、5年生も7月の高専大会を意識し始めて練習に参加するようになった。しかし、

これまでと同様にチーム全員が揃って練習をすることはなかったので、その都度参加を促しながら練習試合などを組んでいくようにした。

1～3年生は、20名の新入部員を合わせて総勢30名(2年生1名途中退部)となり、各ポジションで競争させながら練習を重ねていった。特に1年生には入部してすぐに硬球に対する指導をし、体で覚えさせていった。また、練習試合ではできるだけ多くの選手が経験できるように考えながら選手を出場させた。これまでは出場して当たり前だった2、3年生も、1年生にレギュラーポジションを取られるのではという危機感を持つようになり、改革の効果が表れた。しかし、経験をすべて補うだけの試合数をこなすには期間が短い。7月までの3ヶ月間だけでは技術の大幅な向上は期待できないと考え、甲子園予選での目標を「1回戦突破」に置いた。これまで甲子園予選には特に目標を置かずに参加してきたが、1～3年生チームの目標はあくまでも甲子園予選だということを確認し、過去6年間1勝もできなかったことを考え、1つ勝つことに全力を注いだ。

第83回全国高等学校野球選手権大会秋田大会

1回戦 秋田高専 対 能代西高校

能代西	0	0	1	0	0	0	0	0	1
秋田高専	1	0	0	0	4	1	0	2	× 8(8回コールド)

この試合の勝因は何といっても投手を中心にしっかり守り抜いたことに尽きる。筆者は常々、練習でできたことは必ず試合でもできる、と選手に言い聞かせてきた。そういう意識があったからこそ、ピンチの時でも観衆が驚くほどのファインプレーができたと考える。また、投手もこの試合に合わせて調整をしてきたので、最大限の力を出すことができたと考え。目標を持たせることの大事さが実証された日でもあった。

しかし、残念ながら2回戦は敗れてしまった。1回戦と同じ投手が先発したが、初回到大量点を取られてしまい、そのまま最後まで相手のペースで試合が進んでしまった。

2回戦の試合が終わって感じたことは、選手達は1回戦突破という最大の目標を達成してしまったので、どこか気持ちが切れてしまい2回戦の試合に集中できなかったのでは、ということだった。目標を掲げることは大事なことだが、設定の仕方が難しい。これは監督に全責任がある。今回の大会で、選手達

に試合に勝つことのどん欲さが見られるようになったので、この次の新チームでは、もっと上に目標を掲げる必要があると強く感じた。

一方、4、5年生の高専大会の結果は、残念ながら初戦敗退であった。チーム全員が同じ目標を持って練習に取り組めばまた違った結果になったのだろう。しかし、これまでの練習や練習試合、高専大会での試合への取り組みを見る限り、高専大会で優勝したいという強い信念を持った選手は少なかった。指導者が替わり指導方針の変化に戸惑ってこのような考えになった選手もいると思うが、これまでの練習の参加状況や態度などを見ると、やむを得ないことである。1年生の時から5年後に目標を置く難しさ、年1回しかない大会に向ける気持ちの持ち方など、改めて考えさせられた。また、2つのチームを1人の監督が同時に指導していく難しさ、環境づくりの方法など、今後の課題となった。

7. 1, 2年生新チームでの新たな目標

筆者が監督に就任してからちょうど1年経ち、練習方法や内容なども選手達に浸透してきた。今度の新チームは1年生18名(2名途中退部)、2年生4名という中規模の部員数で秋季大会に臨むことになる。夏の甲子園予選では1回勝つことができたので、この新チームは2回以上勝つこと、すなわち全県大会に出場することを目標に掲げた。勝つことの難しさから、勝ち続けることの難しさを選手に課した。そして、人数的にも無理はないので練習試合を数多くこなし、実践から課題を見つけ練習に取り入れていくことにした。前年のチームは経験が足りなく終

表2 チーム別4番打者打撃成績の比較

項目・選手	H12 K (2年)	H13 M (2年)
打数	19	70
安打	4	33
打点	3	24
三振	1	8
四死球	4	6
犠打	0	2
盗塁	5	8
打率	.211	.471
試合数	5試合	18試合

表3 M選手の年別個人打撃成績の比較

項目・年	H12 (1年)	H13 (2年)
打数	17	70
安打	4	33
打点	1	24
三振	4	8
四死球	6	6
犠打	0	2
盗塁	4	8
打率	.235	.471
試合数	5試合	18試合

盤に逆転されたので、今回はとにかく経験を多く積ませ、あらゆる場面にも対応できる技術、精神力を身につけさせることを指導方針とした。

前年は5試合だった練習試合も、この年の新チームは計18試合こなすことができ、個人成績も数字的にかなりの効果が表れた。

表2は、平成12年秋と平成13年秋のそれぞれのチームで、4番打者を任されていた選手の打撃成績の比較である。違う選手を比較するのではっきりと断言はできないが、試合数が多ければ多いほど経験が積み、成績も良くなっているのではと考える。4番打者はチャンスで打てるのが条件である⁴⁾ので、打点の数がチームへの貢献の目安となる。たくさん経験が打席での緊張感を無くし、実力を発揮することができるのではと考える。また、表3は同じ選手の年別の比較であるが、1年生の時は経験が浅いことから、打点・打率共に低い数字だったが、1年経った新チームでは、培った経験がそのまま数字に表れていることが分かる。それだけ実践の練習試合がチームを作るのにいかに大事かが実証されたのではないかと。

平成13年度秋季中央地区高校野球大会

1回戦 秋田高専 対 五城目高校
 五城目 1 2 1 0 0 1 2 0 0 | 7
 秋田高専 3 2 2 1 0 1 0 1 × | 10

2回戦 秋田高専 対 仁賀保高校
 仁賀保 3 0 0 0 0 0 0 0 | 3
 秋田高専 0 0 1 1 1 3 0 4 × | 10(8回コールド)

準々決勝	秋田高専	対	秋田南高校	
秋田高専	0 0 0 1 0		1	
秋田南	0 0 4 2 5×		11 (5回コールド)	

6位決定戦	秋田高専	対	秋田商業高校	
秋田高専	0 2 0 0 0 0 0 0 0		2	
秋田商	1 0 0 0 0 2 0 0 ×		3	

結果的には全県大会に出場することができなかった。目標を上を設定したので2つ勝つことはできたが、もう一つ勝てば全県大会というところまで進んでの敗戦だった。原因はいくつか考えられるが、最大の原因は現段階での相手との力の差である。敗れた2高校は共に伝統校・強豪校で、その差を埋めるためにはかなりの練習が必要である。しかし、これまでを考えれば強豪校の姿を見ただけであきらめのムードがあったのが、最後まで戦い抜く精神が見られたことが今後の明るい材料となった。また新たな目標を掲げることができたと前向きにとらえたい。

8. まとめと課題

入学時に硬式の基礎基本をしっかりと教え、1～3年生チームを中心に練習を進める体制が確立されたことで、成果が甲子園予選等の大会結果にも表れてきた。身近な目標に向かうことが技術の上達にもつながるし、気持ちも持続できる。そして、高校・大学と同じように考え、3年間積み重ねてきたことをベースに、残り2年間の高専大会に気持ちを切り替えて取り組むことができるのではないかと。基礎基本がほぼ完成されているチームであれば、筆者が1～3年生チームと同様に細かい注意をする必要がないし、高校でいえばOBと同じ存在で1～3年生を指導しながら練習に携わることができるのではない

かと考える。そうすれば、4、5年生の練習での存在が確立されるし、1～3年生を中心に練習を進めることも違和感が無くなる。4、5年生は1～3年生の良い模範になることで気持ちにも責任感が生まれてくるのではないかと。

しかし、課題も幾つかある。今回改革した筆者の指導体制で4、5年生の存在が確立されるまでにはもう2年かかる。その間の練習の体制をどう調整していくかという問題もある。また、2つのチームの主担当教官をどのように考えていくかということもある。シーズンが始まると練習試合を数多く組み込むことになる。その際、1人が2つのチームの監督を引き受けると同日同時刻には当然ながら2つのチームが練習試合をこなすことはできない。実際、他の高専でも同じような課題に直面しているのではないかと考える。今後は全国各地の高専硬式野球部にどのような取り組みをしているかアンケートを依頼し、さらに高専の硬式野球部として充実できる指導体制を追究していきたい。

参考文献

- 1) 続有恒, 「精神発達と教育」第一法規, pp. 265～266, 1968
- 2) 水内宏, 「スポーツ部活の現在」体育科教育, 第40巻10号, pp. 15, 1992
- 3) 小谷寛二, 「スポーツ部活の法律問題」体育科教育, 第40巻10号, pp. 28, 1992
- 4) 荒木大輔, 「スポーツグラフィック野球」成美堂出版, pp. 133, 1998
- 5) 田尾安志, 「実践野球教室」小学館, pp. 64～65, 1998
- 6) 中嶋寛之, 「スポーツのケガと痛みを治す」主婦の友社, pp. 153～154, 1999